

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	慶應義塾図書館蔵『頼朝公橋供養』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1998
Jtitle	三田國文 No.28 (1998. 9) ,p.46- 55
JaLC DOI	10.14991/002.19980900-0046
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19980900-0046">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19980900-0046</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 慶應義塾図書館蔵『頼朝公橋供養』解題・翻刻

石川 透

## 解題

ここに紹介する慶應義塾図書館蔵『頼朝公橋供養』は、室町物語『相模川』として知られている作品と同一内容である。現に、松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』、一九八二年八月）の「相模川」の項には、他の六伝本と共にこの写本が著録されている。

ただし、「現存本簡明目録」では、七伝本すべてがほとんど校異の無い同一系統とされているが、少なくともこの慶応本は、他本と較べて、松本氏の分類でいうイロハのレベルの違いはある。『室町時代物語大成』第五に翻刻された天理図書館本と、比較して言うならば、漢字平仮名の違い以外にも、明らかな本文上の差異が見られるのである。全体的に言えば、慶応本の言辭が少ないことが多いが、慶応本のみの詳細な記述もある。

『相模川』については、以前から、幸若舞曲なのか室町物語なのかという議論があったが、松本氏が「現存本簡明目録」に採用したように、あるいは、藤井奈都子氏が「『相模川』試考」

（『伝承文学研究』第四十一号、一九九三年三月）で論を展開

されたように、幸若舞曲では無く、幸若舞曲系の室町物語とでもすべき作品のようである。なお、『相模川』の詞章の成り立ち等については、前掲藤井奈都子氏の御論を参照願いたい。

本書の書誌は、以下の通り。

所蔵、慶應義塾図書館

番号、一〇X—三四〇—一

形態、袋綴、一冊

時代、寛永七年（一六三〇年）写

寸法、縦二四・二糎、横一五・四糎

表紙、黒色表紙

外題、表紙中央に題簽（後補）、墨書で「頼朝公橋供養」

内題、ナシ

料紙、楮氏

行数、半葉九行

字高、約一八・〇糎

丁数、墨付三二丁

奥書、「寛永七年五月十二日に移是

悪筆也」

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「・」「・」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。擦り切れによる欠落はおよその字数を□で示し、見せ消し部分は（）に入れて示した。本書には綴じ違いが一箇所あるが、正しい場所に移して翻刻した。

### 頼朝公橋供養（後補題簽）

抑、兵衛の助よりも、御代をめされて後、かまくら、やつしちかうをたて、鶴か岡に、三社八幡をたて、三拾八間に、くわいろうをたて、あけのたまかき、大鳥井、心も言葉もおよひかたし。其外、諸寺諸社、さうりう供養に際もなし。

其比、鎌倉に、せうはんと申、大ぢひしんの出家ありけるか、有時、せうはん、さかみ川をとをら□たまへは、はしくつれて、奥よりのほる牛馬人、みな、水におほれてしする事、かきりなし。せうはん、これを御覽して、「我、十九より出家をとけ、い

ま、八拾に成迄、たうたうをこんりうし、大河に舟をうかべ、小川にははしをわたし、きかむをすくい、ちひをもつはらとして、世をわたる身か、いま、此はしを見ながら、橋をわたさて、おゝくの人をころさんは、ふひんなる次第」と、急度思ひ立たまい、吉日りやうしんをゑらひ、はうかをしたて、関東八ヶ国をすゝめ、一し半銭の心さしをうけ、程なく、くわんしんしや

うしゆして、頓而、相模川に、大橋をかけられ、橋の供養に、若宮の別当を始、いまみやの僧正、兩人をさうし申さるゝ。

さて、昌繁は、鎌倉殿へ御参りありて、申されけるは、「さかみ川の橋の、ちやうしゆ仕りて候。供養をのへまいらせ候。ちと、御成有て、せつほうを、御ちやうもんさんさふらへかし」と、申されければ、「やかて、御成」とこそ聞えけり。よりどもの御定には、「か様のせんちんは、重忠」と仰被出るゝ。

梶原、是をき、頓而、悪心をそおこし、いそぎ我宿に帰り、ちやくし源太をよひ出し、「いかにや、源太、物をきけ。君こそ我等かをんを忘れさせたまへ。それをいかにと申に、伊吹山の合戦におくれさせたまひ、かたきましかく追懸ければ、せんかたなきのあまりに、くちたる木のうつろの中へ、御身をしたのはせたましいしを、曾我の助信と我等と、見付申時、「いけとりたてまつり、しやうこくの御まへへ、御とも申ものならば、いかなるおんせうにもあつかり、栄花の家ともさかゆへきを、さすか、人の家のおとらるは常のならい、末代のたのしみにたすけはや」とおもひ、助信に心を合かたらい、よりて見申せば、あんにもたかわす、かくれをわします。其時、かけとき申様は、「さはかせたまふへからす。か様に申者は、梶原平藏かけとき、曾我の助信と申者にて候そや。末代の我々かたのしみに、たすけ申候はん」と申上候所へ、かたき大勢おちあいて、「其木の中に、おちうとの有らん。さかさん」と申ければ、かけとき聞て、「正信、かたくは、我々をうたかわれ候物かな。たれ人もおり候はね」と申ければ、かたきせひにをいて、「ふしきなり。さかし申さん」といゝし時、二人の者、「此木の中には、

何者かおり候へし。我等をうたかわれ候事、無念なり」とて、ふし木の上ゑのほり、たうくとふみならず。誠に、正八幡の御かこにて、ふし木の中より、白きはと舌つとんで出、こくうをさしてとひゆくを、其時、かけとき、助信、力をゑ、「人のあらん木の中に、いま迄鳩の候へきか」と、「かたきはかうこそおちつらん」と、有ぬかたゑをしゑやる。すてに、御命たすけ申、其後、石橋山の合戦にも、「かけときはあらずや」、たひく奉公申せし事、かきりなし。いま此たひにも、君をしゆこし申上、殊更、御代官を被仰付るゝうへは、せんちんなどの事は、世の可存人もあらしとこそ存るに、このたひのせんちんは、ちふ殿におほせつけらるゝ事、くちをしさかきりなし。か様のちうをんを、わすれさせたまふよりともに、つかへてもなにかせん。しよせん、たゝ、もとゆいきり、世をすて、衣をすみにそめ、いかなる野の末、山のおくゑもとりこもり、一向に、弥絶をねんせんと思ふなり。源太、いかに」と有ければ、源太、うけたまはり、「仰せはさる事にては候へとも、しもとしてかみをはからふ事は、くんしの道にもはつれ候なり。あわぬ父の仰かな。おなしくは、思ひ留りたまひ候へかし」と申ければ、梶原、大に腹を立、「下として上をはからふとは、物しりかほのいけんかな。ともかくも、かけすへは、父か命をもそむくと見えたり。二たひたいめんは、叶ふまし」と、けしきもかわり、事をひたゝし。

其時、源太申様、「いつはしは、君の命をおもんし、又は、身のためと存候へはこそ、申ても候へ。さほとに、おもひきらせたまはは、父の命をそむき候事、いかてか候へき。さりな

ら、一心発得の道心ならはこそ、仏道にもかない候へき。人をそしり、身をかこちて、きりたるもとゆいは、邪まなかまんの道心にて、なとか、仏道に叶ひ候へき。さほとにおほしめし切るならば、我が手勢三百余騎候へし。重忠とうち死し、名を高代に残すならば、とんせいらうきやにもまさりなんとおもひ候」と申せば、景時、道理につめられて、けにもとやおもひけん、「此儀尤」と、同じ物の具、よろいとり出し、「うつたてや、兵共」とて、ひそかに下知をそしたりけり。

こくないつうけの事なれば、すてに御前ゑ聞へけり。各さ、やきける様は、「いかに面めん、きゝたまへ。梶原をやこ三人か、おもひ切る物ならば、あまたの人ほろひなん。いかゝあらん」と申ければ、重忠、此よしきゝたまい、「梶原をやこ三人、思ひきりたりとも、さまでの事のあるへきか。ことするわさにてあらね共、かうしもなきにはしかしと、申事の候へは、たゝこのたひのせんちんは、梶原に仰つけられ候へ」と、申させたまへは、御ゆるされもなかりけり。

左土、ちふ殿の、しいて申させたまへは、よりとも、きこしめし、「其儀にてあるならば、重忠はからゑ」と、仰出されければ、すてに、景時、先陣とそ聞ゑけり。梶原、先陣をたまはり、めんぼくをほとこし、手勢三百余騎を、花のこくとくに立せ、せんちんをそしたりける。

さる間、大せうとのゝ、その日の御せうそく、花やかにそ見えにけり。とくさいろのかりきぬに、風にたをめる立ゑほし、あしけの馬に、しろくらをかせ、御身ゆふにそめされけり。

御馬そへには、五郎丸、もゑきにをいはらまき、こ金つく

りのたちをはき、君をしゆこしたてまつる。日てりかさの御やくは、大膳の大夫の御ちやくし、御はかせの御やくは、御一門にておわします、もてきの四郎とのとそ聞えけり。

諸国の大名小名、心々の馬にのり、おもひくらのをかせ、金銀をちりはめたる、ふさしりかいをかけさせ、うつたちたまふありさまは、嵯峨や吉野の花さかり、木末をならふる風情にて、それとあるへきやうもなし。程なく、相模川にそ着たまふ。

さる程に、くやうのとうしには、わか宮八幡宮の曾正別当にてをわしける。心も言葉もおよひかたし。

時刻移て、供養も半の事なるに、俄に風吹来て、しんたうらいてんし、身もそゝろき、くんしゆの人々も、不思議におもひける折節、かまくらの八幡の峰より、ひかり物三つつれて、さかみ川へ落ると見えて、其後、水色五しきになりて、水さかさまにそなかけける。

川上を見れば、つかもなきひさげか、三つつれてなかけけるか、すなはち、龍となつて、みなそこにいり、めうくわと成ても多あかり、かきけすやうにうせにけり。

其次を見てあれは、十二三なる天童の、水のおもてにうかひいて、大しやうとのをまねきたてまつり、水底に入にけり。

其次を見てあれは、としの比十六七の若武者、むらさきすこのよろいきて、あめなる牛に白鞍をかせ、うちのり、しらゑの長刀、水車にまわして、大しやうとのを切奉るまねをして、かきけすやうに失にけり。

其次を見てあれは、ふしたけ十丈はかりなる大ちやの、あまたのつのをふりたて、日月のことくなる眼をくわつと見出し、

大しやうとのをにらみ奉り、かきけすやうにそうせにけり。

其次を見てあれは、北山の方よりも、くろ雲かたな引て、赤はたをさしたて、其勢四五百余騎はかり、ときをとつとつくり、かきけすやうにうせにけり。

其次を見てあれは、西山の方よりも、白雲かたなひきて、しらはたをさしあけ、その勢四五拾騎はかり、さゝめきたつて、かきけすやうにうせにけり。

か様のへんけの物とも、よりどもの御めにかゝると見ゑしより、御馬よりたうとおちさせたまひ、くれくゝとたゑりたまふ。諸国の大名小名、天にあをき、ちにふし、なげきかなしみたまへとも、かひそなき。

畠山の重忠、よりどものむなしき御くしを、ひさのうゑにかきせて、「こは、いかなる御事そや。何国へ御いりますますぞ。これゑこなたゑ、御かへりあれ」と、大おんせうにて申させたまへは、しはらくありて、よりどもは、御いきいてさせたまいけり。めてたくて、よりどもの御定には、「此辺に、たれかある」と仰られければ、くちくゝこゑくゝに、御返しを申す。

よりとも、聞召、「ふしきや、よりともこそ、たゝいま、して三途の川をこゑんと思ひしに、ちゝふ殿のこゑとして、「君は何国へましますぞ。是ゑこなたゑ、かへらせたまへ」と、よははり給ふこゑにつき、立かへると見しより、二度、今生に帰りけるこそふしきなれ」と、仰いたされければ、連座し居たる大名小名は、力をゑ、うれうるまゆをそひらきける。

其後、よりとも、御定には、「たゝいま、それかしか見たるへんけの物を、おのゝは見たまふや」と仰られければ、各申

されけるは、「なにも見申さず」と申されけり。重而、(とり)よりともの仰には、「かやうの事は、ちゝふ殿ならては見しりたまはし。御物かたり候へ」と仰られければ、重忠、おゝせ有けるは、「御定にては候へとも、見申さぬと申さるゝ。さりながら、か様の事は、とり分、先陣のやくにて候へは、梶原殿に御たつね候へ」と申されけり。

其後、梶原をめし出し、「いかに、かけとき、只今、それかしか見たるへんげの物を、なんしも見たるか」と御たつねありければ、たしかに見申たるよし、申あければ、「その儀ならば、ねんころにかたり申せ」と仰ければ、梶原、うけたまはり、「さん候。供養も半の事なるに、鎌倉のやつくの峰よりも、光物三つ、つれてとひ来り、此川へ入そ、と正しく見申て候」と申上る。

頼朝のおゝせには、「光物とは、見る人ことに見てあり。其色こそとへ」と仰られければ、「唯天火のひかり物候」と申。重忠、ゑつうに入たまへは、連座し居たる大名小名は、一とにとつとわらいけり。先陣の梶原は、面目なふこそきこへけれ。

其後、頼朝の御定には、「我京上の時も、大仏供養の時も、平家のあくたう、こつしきの中に身をやつし、五体次めにうるしをさし、あみかさまふかに引こみ、頼朝ねらわんとせしときも、重忠こそ見出したまいて候へ。此度も、ちゝふならては、正しく見しりたまふへからず。御物かたり候へ」と仰られければ、重忠、申させたまいけるは、「御ちやうのことく、其時は、先陣仕り候へは、平家の悪たうとも、あまた見出したる事も、御入候。此度は、はるかにほとをへたて候へは、見しり候はぬ」

と申されければ、頼朝のおゝせには、「か様成一大事の事をき、申さねは、むねはれやらす。又、所望申も面目なし。さりながら、此度は御物かたり候へ。重而はともかくも」と被仰候へは、重忠、うけたまはり、「さらは、かたりまいらせ、諸国の大名小名のしんい、ふしんの胸内をはらさせん」と思召、「御錠にて候へは、重而ちたい申にをよはす、申上候はん」とのたまいて、ひさをなをさせたまいて、いけたかくのひあかり、菅尺二寸の御ひけを、三度下へなてをろし、へんせつはあきらかなり。言葉に花をさかせつゝ、一時か程こそかたりたまふ。

「さるほとに、供養も半と見多しとき、鎌倉のみねよりも、光物三つとひ来て、さかみ川にいと見しより、水さかさまになかれて、川上より、一番になかれしひさきは、たんしやうの入道、しやうかいのたましいなり。二番になかれしひさきは、いけとのゝたましいにておわします。三番になかれしひさきは、二位殿のたましいなり。其次の十二三歳童人は、せんでいにておわします。其次の十六七の若武者の、うしにのりたるは、くわしくはしらす候へとも、一の谷の汀にてうたれたまいし、むくわんの大夫あつものたましいなり。其次のふしたけ十丈ばかりなる大ぢやは、のとかみのりつねのたましいなり。其次(の)は、北山より黒雲たな引、赤はたさしたて、其勢四五百騎はかりにて、よろいかふとのおもかけにて、ときをとつとつくり、かきけすやうにうせしこそ、平家の侍共、爰かしこにてうたれし、そのはうこんにて候。其次、西山の方よりも、白雲けしからすたな引て、白はたをさしあげ、其勢四五拾騎斗にて、さゝめき立て出られしこそ、かたしけなくも、御しやていの、

九郎太夫判官殿の、御はうれいにてをはしましけるそや」と、一々次第に申されければ、君をはしめたてまつり、諸国の大名小名、一度にあつと感し、「誠にもつて重忠は、人間のわさにてなかりけり」と、さゝやかさるはなかりけり。

頼朝の御説には、「平家の悪りやう来て、我にうらみをなすは、さも有へし。九郎か靈魂来て、我にしよいをなす事、ころもとなし。さりながら、うらみんことのあるならば、いわせてきかためそかし、いま一たひよひ返し、ものをいわせてたひたまへ、重忠」と仰ければ、ちゝふ殿はうけたまわり、「むかしかいまにいたるまで、しゝたる人を、二たひよひ返し、物をいわする事共は、ためしすくなき事にて候へは、おもひもよらす」と申されければ、其時、頼朝の仰には、「それはさる事にては候へとも、ま見ゑ申ほと的事ならば、物をいわてはあるましき。さなくは、まほろしのことくに、こゑはかり成りとも、いま一たひ、きかせてたひ候へ、重忠」と仰ければ、「重而、御説のくたるうへ、とかく申におよはず」とて、御前をたちたまひ、其勢武百余騎を、花のことくに立せ、重忠のせうそくには、しらきぬのひたゝれに、卯の花をとしのよろいきて、白さやまきの太刀をはき、花あし毛の馬に、白ふくりんのくらおかせ、引よせゆらりとうちのり、武百余騎をいんそつし、なにも見ゑぬ相模川にうちよせ、ゑひら梁くいうちたゝき、ときをとつとつくりければ、又、しんたうらいてんはおひたゝし。

其時、重忠、川中へ、馬のふと腹ひたるほうちいれ、大音声にて名乗給ふ。「抑、福將軍の御使に、罷出たる者をは、いかなる者と思召。和田の天王に十代、畠山のせうし重忠なり。」

あれに見ゑさせたまふは、九郎太夫判官殿と見たてまつりて候。いそぎ、こなた多御出まします。物申さん」と有ければ、あんのことく、西山の方よりも、又白はたをさしたてゝ、その勢四五拾騎、さゝめきたつて来りたまふ。

まつさきを見てあれは、ひをとしのよろい、おなしけの五まいかふとに、くわかたうつ（たるかゝとを）て、たつかしらすへたるをめし、くろき馬にのりたまひ、雲の中にかひ出、重忠を御覧して、こてのくさをかほにあって、さめくくと鳴たまふ。

ちゝふ殿は御覧して、「是に見ゑさせ給ふは、源九郎義経と申たてまつりて候。御心にかゝりたまふ事の候者、重忠に仰られ候へとの御事にて、將軍よりの御使に罷出候」と申させたまへは、其時、義経仰けるは、「あらはつかしや。しゆら道のくるしみ、おんあいへつりのかなしみに、りんゑのきつなもはなれやらす。又、いにしゑの人々にま見ゑ申事、なによりもつてはつかしけれとも、とかもなき義経か、うしなわれ申せし事、なによりもつてむねんなれ。此いきとをりを、さんせんとおもふおりふし、さかみ川の橋の供養を、ちやうもんにいってん、いかにとおもひしに、平家の一門れうけをなし、將軍の命をすてとらんとしたりしを、おもひなからも、しんきやうのれいをおもんし、いそぎこれまで罷出、せめたゝかわんとおもひしに、くわはういみしき將軍にて、ちゝふ殿にさとられつる。悪れうもかなわすして、又すこゝとうせにけり。扱又、我等をよしつねと見つけられし事ともは、よにはつかしくおもへとも、尅つはうらみをはれんため、ちゝふ殿はいにしゑより、したしくなれば候へは、心のうちをのこさず、ありのまゝに申さん」とて、

こまやかにこそかたらせたまふ。

「さるほどに、義経は、保元平治の軍やふれしより、父義友におくれたまつりしより此方、一日片時もあむとのおもひをなさず、やうちの身なれば、母のふところのいたかれ、おちうとの事なれば、都をしのひいて、おちこちのいつくのほともしらゆきの、ふみまよいたる事なれば、木幡山路にゆききれて、せんかたなくて、ときは御前は、すこし木影のありけるに、たちよらせたまひつ、若三人をやすめんとて、ふりつもりたる白雪を、御にてかきのけたまい、御こそてをしかせ、若三人をすへならへ、御身は風ふく方のかきとなせたまひ、涙にかきくれたまへは、おさあい者のはかなさは、つめたくさむきにまかせつ、母御前にすかり付、もたへこかれなきければ、母御せんはきこしめし、『やういかに、若ともよ。人めしのふの道なれば、あやしめられて如何せん。おとせてねよ』と仰られ、夜すから涙にしつみしを、思ひ出せばあわれなり。扱それよりも、爰かしことまよいしに、又引かへて、ときわは、かたき平家にたはかられ、せうこくせんとありしとき、母御前のちりやくには、『若三人のたすからは、ともかくにもなひくへし。それさなき物ならば、ともに自害』とありければ、清盛不信におもひつ、きしやうをかいてまいらせける。そのみならず、一門はのこらす、きしやうを書ければ、やうく／＼なひかせたまひつ、道ひろくなりたまひ、あにいまわか殿をは、たいこの寺に上げたまふ。おとわか殿をは、嵯峨の寺へあげたまふ。われをは、くらまへ上げたまふ。其時、自おきな心におもふやう、『誠や、此山は、天狗のすみかとうけたまはる。

さあらんにをいては、兵法の術を究め、いま一度、平家をほろほし、源氏の世を立はや』と思ひ、僧正か谷へこもり、大てんくう、小てんくうにあひなれて、兵法をきわめ、十三のはるの比、蔵馬の寺を、夜に紛しのひいて、東を指て下る。道すから、とまりく／＼の夜うち共を、爰かしこにてしのきつ、くるしみの涙に、たもとのかわくひまもなし。物うき旅に身をやつし、奥州へくたり、秀平をたのみ、さま／＼にけしやうをめくらし、ほとなく、山きの判官をうちしたかへ、頼朝を鎌倉へ入申。それより後、それかしに御代官を給り、三河守と同心に、きそのついたうにせめのほり、ことゆへなくたいらけ、ていたうをしゆこし申、其後又、平家、津の国一の谷に楯籠、ついはそのいんせんをたまはり、ちふ殿のしろしめされしことく、一の谷てつかいか峰を落し、命は野山にくちはてん事をかゑりみす、ほとなく平家をせめたかへ、一門のこらすうちはたし候事は、たかくんかうにて候へき。されは、せんてい、女院、又のこりたる一門は、讃岐の八島にたてこもりたると聞しより、頓而、船を出しつ、おしわたりける程に、風はけしく吹けれども、ものともせず、やす／＼とおし渡り、八島の大裏をせめおとし、殿中に火をかけ焼払、落行かたきをおつかけ、長門の国に聞へたる赤間か関にておつつめ、残りなくうちはたし、宗盛ふしをいけとり、三しゆのしんき、事ゆへなく都へ入し事とは、天下のちうかう、当家の面目、何事か是にしかん。此上は、日本半国の主とも、なさせ給はんかと思ひしに、おもひの外に引かへて、宗盛ふしのめしうとをは、鎌倉へめしとりたまひ、ゆいかいなきもの、さんそうにより、義経をは、こしこへより追返

されし事は、かへすくもむねんなり。其上あやまりなき事共を、一つうにしたゝめ、指上るといへとも、御同心なきによつて、かさねて申上るにおよはず。其時、亀井、片岡、伊勢、駿河、武蔵坊、申様は、『かほとあやまりなき御胸を、御ゆるされなきこそむねんなれ。いさや、人々、かまくらへ、よにまきれみたれいり、此いきとをりをさんせん』ため、すてにうつたちしほ、義経は親兄の礼をおもんし、ひとまつ都へのほり申さんと、又すくくとのほりしか、御ふきやうの身なれば、昨日の道に引かへて、人めも姿もはつかしく、とまりくせきくをも、しのひかほにてのほりつるか、伊予の国のしゆこととして、うきとしつきをくらせしか、なにかさのみにくうして、うつてをはたまはるそや。たというしないたまふとも、数有る侍をもたまわらて、こんわう丸をたまはりて、よしつねうたんはかり事、無念なる次第なり。扱、あるへきにあらされは、四国の方ゑおちゆかんと、渡辺より舟にのり、海路遙におし出す。爰かしこにてうしないし、平家の悪りやう、うみにうかみ、悪風を吹かけ、白浪はせかいをあらひ、しんたうして、舟をなみ間ゑゆりいれんと、さまくなんきにおよひしとき、いかて、ろく地につくへしとおもふ折節、北山の御せんは、舟の心ちにて、氣をうしない、たゑいりたまふ。其外の女房も、みなくたゑいりかなしむも、是と申も、ゆいかいなき、かちわらかさんにより、身のをき所のなきまゝに、かゝるうきめを見る事も、思ゑは心もくれくと、あくしんむねにみちくゝて、はれやるひまもあらされは、かひもなく、もとのちに吹もとされて、ちからなく、住吉にあかりつゝ、吉野山に入ければ、しゆとの人々

是をみて、心かわりを仕り、此山を落ゆきて、奥州へくたりしに、とまりくせきくにて、心く身にかくし、女おち子に出立せ、しのひてとをる時もあり。又ある時は、あき人となひ、とをる国も有。山ふしのすかたにさまをかへ、ときりやうかうたる所もあり。汀の舟に係舟して、浪路をとをる時も有。越後の国につきければ、なをいの太郎にあやしめられ、やうくそれをいゝのかれ、舟を仕立て押出す。おいての風にほをかけて、はるかに赴ゆきければ、又、平家の悪りやうとも、うんかのごとくうかみいて、すてに命もあやうきを、むさしかはかりことにより、すてに命をたすかりて、やうくいそくと申せとも、百二十日と申時、奥州に着ければ、秀平、なのめに喜、高たちと云所に、しんそうに屋形を立、柳の御所と申て、いつきかしたつきたてまつり、少心のひし時、うみむしやうのかなしさや、秀平、病の床にふし、程なくむなしくなりければ、百日も過ぎるに、なにかわさのみにくうして、義経うつてまいらせよと、たはかり御判くたさるゝ。秀平、浮世に有時は、一所にとこそ契しに、たはかり御判をはいけんし、秀平子供は四人まで、心かわりを仕る。其中に三さんは、なみたをなかし申ける。『口惜の兄弟や。父のゆい言めされしも、是をこそいゝたまへ。此むほんにおいては、いつみはあらし』とて、床敷を立て、我か屋に行。残る兄弟、申様、『にくき、いつみか云様かな。いさ、をしよせて、腹きらせん』と、てるい、かなさは大名にて、和泉か城へおしよせて、腹をこそきらせけり。いとけなきわか共を、やみくゝとさしころし、女房ももろともに、ちかいしてこそうせにけり。是と申も、義経殿、かくなりはつる

者共は、悪心胸にこもりつゝ、むみやうのやみははれかたし。又よしつねかさいこのてい、申てもつきかたし。我にちうある侍共の、其かうはおくりかたし。さちんよりもてとをなりし、きそよし中をせめしたかへ、又、平家ついたうのくんかう、国々において、一命をかるんし、義経か気をおもんし、たゝいま迄つきそいたる者共に、一時のあんともなさせし事、又、北山の御せん、いとけなきわかともを、みなく衣川のみくつとなしつる事、むかしをいまに、おもひつゝけてあんつれば、悪心胸にこもりつゝ、うかむ世さらに候はず。是も思へは、よりに、うらみはさらにつきかたし。されとも、此比、平家悪りやうとも、頼朝の命をとらんと、たくみつるをりふし、此さかみ川の橋の供養をさいわいに、おのくうかみいてけるを、君にしらぬみやつかいと、義経是にてたゝかう事、たせいにふせい、かなはねとも、日夜に出てたゝかうなり。是もおもへは、よしつねか、君にうらみはふかけれと、しんきやうの礼をおもんし、いま迄はかくまいし、其しうしんのくるしみを、はらさんために、よしつねは、此くやうおちやうもんし、是迄いてけるおりふし、れいのあくりやう、うらみをなす。そのみならず、せんもなきかちわらか、せんちんを見るよりはやく、悪心の胸にみちく、くるしきこそ、むねんたくいはなかりけり。たゝいま、君の御命の、あやうくみゑさせたまふ事も、かち原殿にてありければ、ともかくにも、かちわらは、かま倉中のためには、大六天のまわうとは、かれか事をや申すへし。かへすくもむねんなり。義経はてし其あとに、念仏一へんゑかうして、甲人もあらされは、まよいのくもにひかれつゝ、二たひ

まみゆる事ともこそ、ともかくにもはつかしけれ。いとま申て、さらは」とて、雲にまきれて失にけり。

其跡を見てあれは、伊勢の三郎吉盛、熊井太郎、熊井二郎、龜井、片岡、すゝきとの、皆くもの内に立出て、「あらめつらしや、重忠。とかもなき我が君を、うしないたまふ頼朝の、御心のうちこそ口惜けれ。いとま申て、さらは」とて、かきけすやうに失にけり。

其次を見てあれは、武者彦騎すゝみ出、大音声にて名乗けるは、「只今、爰元ゑすゝみ出たる兵を、いかなる者と思召。父のゆいこん、きしやうのはちをそんし、うち死を仕りし、和泉の三郎忠平なり。かく申は、はつかしけれとも、我々か兄弟共の、はてうするありさまを、御らんせられ候へ。いとま申て、重忠」と、かきけすやうにうせにけり。

其次を見てあれは、くろかわおとしのよろいきて、四尺はかりなる太刀をはき、大長刀を水車にまわいて、「あらめつらしや。かく申者は、武蔵坊弁慶なり。あのゆいかいなき者の、さんそうにつかせたまふ、頼朝の御心の内こそ無念なれ。此いこんをさんせんには、弁慶、荒人神と成て、こつめつのあはうらせつ、しやはにては、大天狗小天狗、おのく摩魂をかたらい、かまくらに火の雨をふらし、人ちくともにやきころし、かまくらはは、くろ土になさんとおもへとも、君は、只今迄も、しんきやうのれいをおもんし給ふ故に、せいしたまへは、心にまかせぬ事の口惜さよ。かちわらおやこ三人は、三日の内をはすこすまし。いとま申て、重忠」とて、雲にかくれてうせにけり。

頼朝、是をつくくくと聞召、「あつははれ、むねんのしたいか

な。ねんらい、義経か恨のいしゆの事共を、只今こそ、うけたまはりて候へ。ともかくにも、梶原故、又、さきほと頼朝か身の大事となる事も、以ては是も梶原故。ともかくにも、かちわらに、同心しつる口惜さよ。とかもなきよしつねに、つみをきせし事共こそ、いまもつて無念なり」と、御らくるいはかきりなし。「それほと、わさわいたくみたるかけときを、しられていままでたて置事、片時の内もかなふまし。かけときをやこ三人(を)、かうへをはねよ」と仰ける。

めんくはうけたまはり、御誼のくたらぬ其さきも、諸人にくまれ候へは、此御誼をさいわいに、「いそきうつたて人々よ。時刻うつしてかのふまし。かけときかくひを切り、諸人のむねをさんせん」と、われもくをしよする。

梶原、此よしきくよりも、かなわしとおもいけん、何国をさしておちけるか、爰に、人のきわめのかなしさは、宇津の宮の弥三郎、まといてありし所を、のりうちしてそおちける。

弥三郎、是をみて、「ちもんたもんはいさしらす、弓の前の乗うちは、せひにをいてのかすまし。失一すしとらせん」と、引まふけたるまとやにて、ひやうふつといたりければ、うんのつきたる梶原か、めてのこみゝのしたつらに、のふかにこそはたちにけり。たまりもあへず、とうとをつかゝりける所に、誼意に出たる兵共、此よしを見るよりも、「そのかちわらは、御まへの御かんきをかうむりて、しのひておちゆく者なれば、誼意にまかせて、我等こそ、是までおつかけ申なり。うちとむる者なれば、たやすくいさせたまふかな。いたりやく」と、ほめければ、ともつな、なめによるこひて、首をきりしたゝ

め、かまくらへまいりつゝ、此上かくと申ければ、頼朝、大にきよかんあつて、そのときのけちやうに、いよの国北の郡をたまはりて、しよち入とこそきこへけり。

源太兄弟は、爰かこにていけとりて、ゆいのはまにてきられけり。是と申も、人間は生をうくれはしゆくゑんあり。とんちひんふくのたせうなり。そうらんもせんとほつすれば、しうふうこれをやふる。わうしやあきらかならんとほつすれば、さんんこれをおわうとは、いまこそおもひしられて候へ。かゝるすちなきかちわらを、うちたやさせたまいしより、これを見る人間人は、いよくちんきをたしなみて、あにはおとゝをれんみんし、おとゝはあにゝしたかい、くんしの道を、たゝしくおこなわれ候へは、鎌倉殿のめてたき御代、末繁盛とそ聞えけり。

寛永七年五月十二日に移是

悪筆也

(いしかわ とおる)